鎌倉極楽寺・浜田頓坊 ー古都々逸ほのぼのラリー 158

《「つ(ツ)・タヌキさん」1年生・長男発言で大笑い》

『じつは裁判所ってこんな所なんです』

◇ちょっと変った タイトルの本
　元は書記官 つい買った

◇裁判所 勤務20年 いろいろあって
　いわば卒業 日記だと(中村さん)

◇法学部 なんで選んだ 「ツブシが効く」と

わしは簡単　その程度

◇長男が1年の時に　綿貫君を　招介したんだ
「ワ(ツ)・タヌキ」さん

◇彼も書記官　親友のこと
想い出すのも　歳のせい

《「歌は祈りなんだよね」そうだそうだという想い》

◇さだまさし「祈りつてこと」「それこそ僕の
歌だと思って」きょうもまた

◇反戦の「ざわわ、ざわわ」と 60回も
父が作った 歌を継ぐ (寺島多紗子さん)
◇その昔 「海の向こうから イクサがきたよ」
歌詞をゆつくり はつきりと
◇すばらしい 「地球まほろば」 宇宙の視線
毛利衛氏 座右の銘
◇「地球まほろば」 まつただ中で
人を殺している阿呆

先輩たちの残した都々逸

◇酒はのみとげ　浮気もしとげ
　ままに長生き　しとげたい
◇腹が立つときゃ　この子を見やれ
　神のよいとき　出来た子じゃ　（詠み人知らず）

(ed)

朝日新聞　第3種郵便物認

5/22 朝日より

ざわわ 歌われない日まで

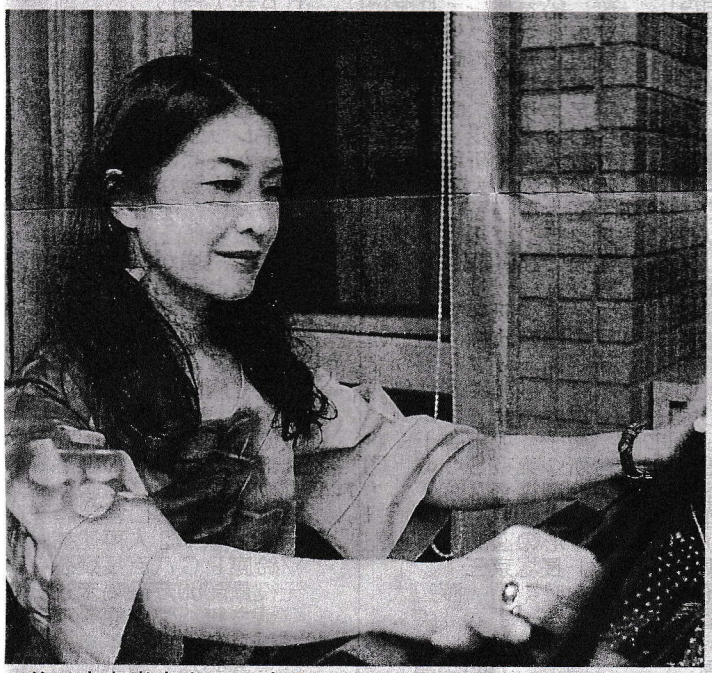
復帰50年 沖縄戦

10分余りの歌を歌い終えると、観客席は一瞬、静まりかえる。30年ほどソプラノ歌手を続けているが、拍手や歓声ではなく、必ず静寂に迎え入れられるのは、この歌だけだ。

寺島夕紗子さん(52)＝東京都狛江市＝は24歳のとき初めてソロで歌い、とりこになった。

〈ざわわ、ざわわ、ざわわ〉

――。66回繰り返す。感情にとらわれすぎず、淡々と。それがこの歌をつくったひとの教え。その教えを心がけるほどに、静寂は深く、平和を思う心が、観客にも自分にも育まれてきたと



父・寺島尚彦さんの歌「さとうきび畑」を歌い続ける夕紗子さん＝6日、川崎市の洗足学園音楽大学

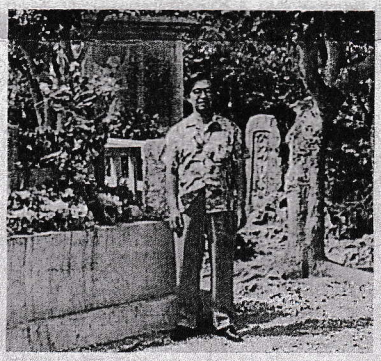
しかし、今、その自負が大きく揺らいでいる。がれきの中に立ち尽くす人。毛布にくるまる子ども。テレビから流れるウクライナの映像が脳裏から離れない。

〈昔海のむこうから いくさがやってきた〉。歌詞を口にすると、今この瞬間に命を落としている人たちの姿が想像され、無力感にさいなまれる。

「さとうきび畑」。音楽家の父、寺島尚彦が作ったこの歌を、私が歌う意味はあるのだろうか。

幼いころ、自宅2階の自室にいると毎晩のように階下から聞こえてきた。父のレッスンを受けるために集った音楽家たちが奏で、歌っていた。「もっと楽しい歌がいいな」。意味はよくわからないが、歌詞のなかで父

平和への一歩に　父が作った歌を継ぐ



尚彦さんが初めて訪れたときの写真。右奥は「ひめゆりの塔」＝1964年6月、寺島夕紗子さん提供

親が死ぬという点だけは理解でき、怖かった。

この歌が、歌詞には出てこない沖縄を歌ったものだと知ったのは、だいぶ後のことだった。

初の東京五輪が間近に迫っていた1964年6月。尚彦さんは米軍統治下の沖縄にいた。34歳。手がけた曲はヒットし、全国を飛び回っていた。沖縄でのコンサートを終えると、知人に戦跡めぐりへと誘われた。

地上戦から20年ほど。尚彦さんは、次第に胸が締め付けられた。気づくと、背丈よりも高く伸びたサトウキビに囲まれていた。知人に声をかけられた。

「あなたの歩いている土の下に、まだたくさんの戦没者が埋まったままになっています」

それから1年半、尚彦さんは、言葉を探し続ける。

〈ざわざわ〉では騒がしすぎる。〈さわさわ〉は優しすぎる――ざわわだ。

のちに書き残す。《青空、太陽、緑の波うつサトウキビすべてがモノクロームと化し、私は聞ける風の音だけが耳を圧倒し、その中に戦没者たちの怒号と嗚咽を私は確かに聴いた》

完成した「さとうきび畑」は67年にコンサートで披露され、2年後、森山良子さんの歌でレコード化された。ただ、尚彦さんは「流行ることを拒否した歌」とも語った。

「『いつか歌われないときが来てほしい』。父は何度もそう話していました」。夕紗子さんは言う。

その夕紗子さんのもとには今春以降、さとうきび畑を歌ってほしいという依頼が続々と届く。

〈忘れられない悲しみが／波のように押しよせる〉

淡々と、淡々と。これまで以上にそう心がけるが一層胸が苦しい。

父は2004年、闘病の末に73歳で亡くなった。03年、イラク戦争が始まった直後に遺作を発表。病床では「戦争を止めに行く。荷物をまとめてくれ」と、うわごとを繰り返していた。何が父をそこまで駆り立てたのか。「さとうきび畑」を作ったものとしての責任だったのではないか、と夕紗子さんは感じている。

この歌が歌われなくなる日は来るのだろうか。「歌うことが一歩になるのかもしれない。やめてしまえば、その一歩さえ進めなくなる」。夕紗子さんは26日、2年半ぶりに沖縄のステージに立つ。

（国吉美香）